

〈隷書〉

秋涼春暖
筋骸健
雨後晨初
意思清

清原大龍先生書

(この課題で書体は自由。但し、この課題は一人一点のみとする)

半折作品は各課題ごとに横／＼に一枚ずつたんで提出ください。

〈楷書〉

秋涼春暖
筋骸健
雨後晨初
意思清

吉田成美先生書

□ 秋涼春暖筋骸健に
雨後晨初意思清し (不詳)

次号予告「金餅隔林明」

〈行書〉

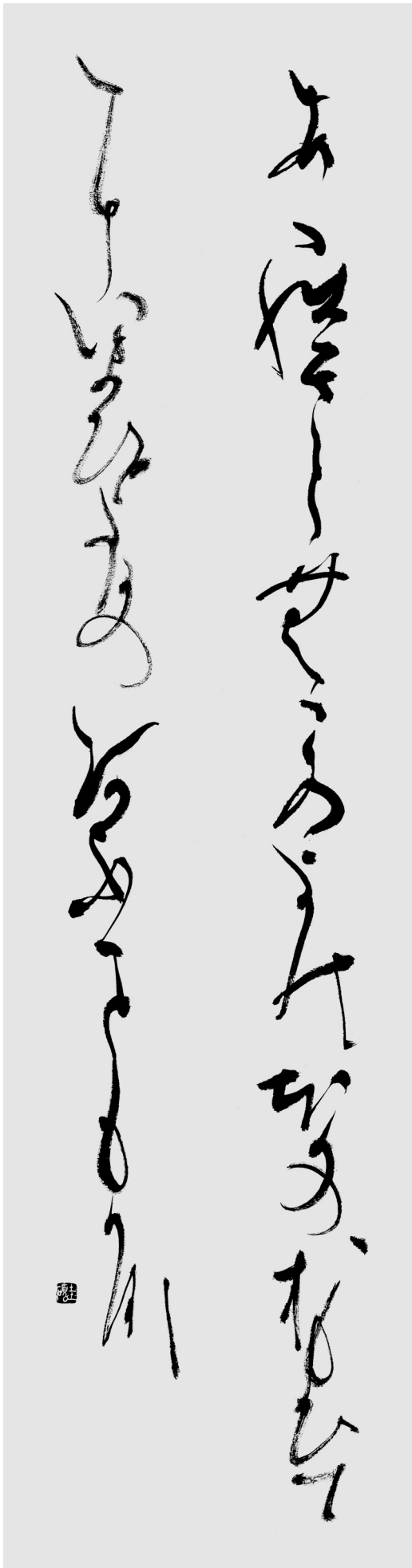


井之上 南岳先生書

▽秋は涼しく春暖かに身体は達者に、雨あがりや早朝には心持がすがすがしい。

条幅随意（この課題以外の語句書体自由のものもよい。但、この課目のいずれか一点のみとする）

舟尾圭碩先生書



□ あはれ^らさる^ら無^む このよ能^の本^の可^かの おもひて耳^に いまひと多^た日^ひの 阿^あふことも可^か那^な △百人一首五十六△
あはれさるるむ この世のほかの 思ひ出に いまひとたひの あふこともかな

条幅随意（臨書）（この課題以外の語句書体自由のものもよい。但、この課目は一人一点のみとする）

山本飛雲先生臨



▽李思訓碑

贈寧州刺史諱孝斌或集事雲雷

条幅随意（この課題以外の語句書体自由のものもよい。但、この課目のいずれか一点のみとする）

吉田成堂先生書



□窪田空穂のうた 砂白き 磯につくばひ 秋の日を 大海原に 手を浸し見る

《手本（課題例）にとらわれず意欲的な作品を期待します。》

半折作品は各課目ごとに横／＼に一枚ずつたんで提出ください。

条幅 随意参考手本（半折 $\frac{1}{2}$ 横のみ） —10月末日締切—

（この課題以外の語句書体自由のものもよい。但、この課目のいずれか一点のみとする）

《手本（課題例）にとらわれず意欲的な作品を期待します。》



山 本 飛 雲 先生

□ 岸原清行の句

天山へ

道つづらなす

葛の花

天山への登山道は幾重にも曲がりくねり、紫紅色の花穂をつける葛の花が、折れそうになる心をなぐさめてくれる。葛の花は秋の七草の一つ。雄大な山野をイメージして書作して下さい。



小 島 秋 聲 先生

□ 玄黙

もの静かで口数が少ない様

「漢書」

文字の大小はつけ易いと思いますが、その分、「玄」の文字に強さを表現したく落筆や遅速に留意しました。「黙」は少し文字の懷に配慮をして、明るく。

※半折 $\frac{1}{2}$ 横

の出品票

は作品の

左下に貼

って提出

下さい。

(この課題で書体は自由。但、この課目は一人一点とする)



□ 光は細くして弦初めて上なり(唐・杜甫)
月の光は細くて弦がようやく上向きになった。

次号予告「遠鴉追夕照」

吉田成美先生書

(この課題で書体は自由。但、この課目は一人一点とする)

□ 光は細くして弦初めて上なり(唐・杜甫)
月の光は細くて弦がようやく上向きになった。



次号予告「遠鴉追夕照」

吉田成美先生書

(この課題以外の語句書体自由のものもよい。但、この課目のいずれか一点のみとする)

□ 縦適 (「三国志」蜀書・簡雍伝)
ほしきままにする。



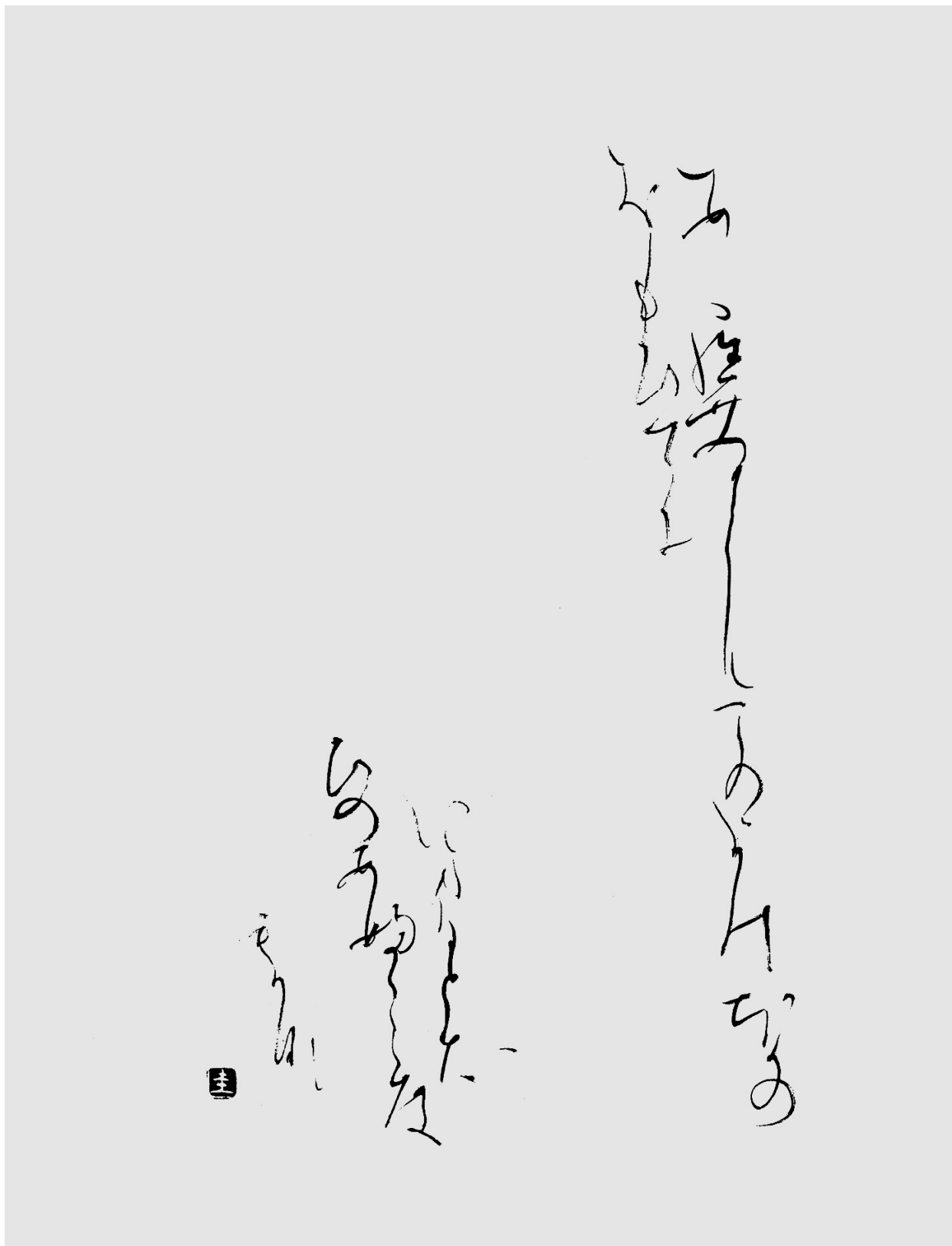
半紙随意参考手本 —10月末日締切—

(この課題以外の語句書体自由のものもよい。但、この課目のいずれか一点のみとする)

△仮名▽

あらさるむ この世のほかの 思ひ出に いまひとたひの あふこともかな

□ あら^ら散^さら^ら無^む このよ能^の本^は可^かの おもひて^に 万^ま日^ひとたひの あ婦^ふこ度^とも可^か那^な



舟尾圭碩先生書

半紙随意参考手本 —10月末日締切—

(この課題以外の語句書体自由のものもよい。但、この課目のいずれか一点のみとする)

△詩文書▽

沢木欣一の句

十三夜 じゅうさんや

乏しき星の とほほしきほし

光り出づ ひかりいづ



※出品券は、半紙をタテにした左下に貼って提出ください。(ヨコ作品の場合も半紙をタテにして同様に貼ってください)

渡 邊 大 嶽 先 生 書

（この課題以外の語句書体自由のものもよい。但、この課目は一人一点とする）

△臨書▽
点画の流れや、縦長の字形を意識して伸やかに書こう。



「贈寧州刺史」

吉田成美先生臨

(この課題以外の語句書体自由のものもよい。但、この課目のいずれか一点のみとする)

姓
号

柿の実	菊人形	銀杏	秋晴れ
金木犀	松茸	鰯	団栗
栗ようかん	もみじ前線	中秋の名月	秋冷の候

△実用書▽

秋晴れ 団栗 秋冷の候 銀杏 鰯 中秋の名月 菊人形
 松茸 もみじ前線 柿の実 金木犀 栗ようかん

(この課題以外の語句書体自由のものもよい。但、この課目のいずれか一点のみとする)

△手紙文▽

昨夜夕月の落ちかゝる頃 函館の港に着きました 北の国は間もなく美しい紅葉の季節ですが
初めての一人旅は 遠い国にでも来たような 何となく淋しい風景に見えます
喜代

昨夜夕月の落ちかゝる頃函館の
港に着きました 北の国は間もなく
美しい紅葉の季節ですが初めての
一人旅は遠い国にでも来たような
何となく淋しい風景に見えます
喜代

伊良子 喜代先生書

(この課題以外の語句書体自由のものもよい。但、この課目A・Bのいずれか一点のみとする)

書譜

△暮らしに役立つ書▽

心地よい気候になりましたね。
週末は、保育園に通う薰ちゃんの初めての
運動会だとか。お年当や撮影準備など、
ご両親は飛び回ってる頃でしょうね。
ダンスや親子競技などの可愛い姿が目
に浮かびます。会に行けず、残念です。
秋晴れの空の下、笑顔溢れる一日にな
ると良いですね。写真を楽しみます。

千明

野のある便箋に書いてみよう。

△26 cm × 18 cm▽

紙質は自由。

・日常生活の中で文字を書く場面（署名や申込書など）では、大抵が横書きです。縦書きは難しいという声も聞きますが、少しずつ慣れていきましょう。まずはメモ書きから縦書きに変えてみるのは如何でしょうか。

※ 本研究社にて「特選便箋」を発売しております。本誌裏面をご参照の上、ご利用ください。

兵頭白慧先生書

世界の子

小学4年

火山ばい

小学3年

つなひき

小学2年

おし

ようねん・小学1年

(この課題以外の語句のものもよい。但し、その学年にふさわしい語句が望ましい。)

長い旅路

中学2・3年

紅葉狩り

中学1年

創造する心

小学6年

強い信念

小学5年

坂元紫香先生書

△条幅¼ 四尺画仙紙半折¼ : 68cm × 17.5cm ▽

□「ハライ」「ハネ」「トメ」のちがいにきをつけて、ていねいに書きましょう。

ひつ
きな

小学二年

次号予告「ひつじ」

□「む」の「むすび」は、筆の軸だけをまわさないように気をつけて、のびやかに書きましょう。

むし

ようねん・小学一年

次号予告「うめ」

坂 元 紫 香 先 生 書

□文字の字形と大きさに気をつけ、「世」は幅広く、「界」はタテ長にバランスよく書こう。

世
界

小学四年

次号予告「日光」

□文字の中心に気をつけながら、左の「ハライ」、画の接するところをよく観察しよう。

火
山

小学三年

次号予告「文化」

吉 田 成 美 先 生 書

小学 五年

次号予告「歴史」

信念

□「信」のつくりの横画の長さと巾に注意し、「念」は左右のハライをのびのびと。

小学 六年

次号予告「古都の町」

創造

□「創」は二画目の線の方向に注意して、「造」は最後の「しん」による「ノ」をのびやかに。

秋 永 春 霞 先 生 書

中学 一年

次号予告「富士五湖」

紅葉

□行書は点画の省略や筆順の変化などがあります。「紅」は糸、「葉」は省略と筆順に注意。

中学二・三年

次号予告「美しい自然」(行書)

旅路

□「へん」とつくりのバランスに注意し、筆順・点画の省略、右払いの「トメ」に気をつけて書こう。

吉 田 成 美 先 生 書

小学二年

[illegible]

坂元紫香先生書

ようねん・小学一年

④ たてでよ(に)せんにつける ⑤ まげる 空 空 空 (そら) ナ ナ ナ	段 級	で	い	な	く
	氏 名		つ	か	じ
		い	は	を	ら
		き	い		は
		ま		げ	
		し	す	ん	空
		た	す	き	の
		。	ん		

小学四年

〇とめる 〇つき出る 〇はねる 〇はねる	段 級
	氏 名
	一 十 中 出 出
	〇とめる 〇つき出る 〇はねる 〇はねる

うなギは、ごんの首にまき
 付いたままはなれません。
 ごんは、そのまま横っ飛び
 に飛び出してにげました。

坂元紫香先生書

小学三年

[illegible]

小 学 六 年

ぱつと明るくなり、日光の黄金は、
 夢のように水の中に降ってきま
 した。波から来る光のあみが、底
 の白い岩の上で、美しくゆらゆら
 のびたり縮んだりしました。

小 学 五 年

外来語は、ふつうかた仮名で書		き表します。外来語には、日本		人が発音しやすいように変形		されるなど、元の外国語とはち		がうものが少なくありません。	
段 級		氏 名							
㊦つける ㊦つける ノイ 仁 仰 仮 フ ヲ ス ㄨ ㄨ ㄨ ㊦上にはゐる 発		㊦まつく下におろす ㊦はらう ㊦はゐる 一 二 三 亦 変 変							
仮名 (かな)									

小 畠 秋 聲 先 生 書

一 般 (A)

(この課題はA・Bいずれか一点のみとする)	
段 級	
氏 名	
※12%拡大で原寸大になります。	

「万葉集」に現われた植物の第一位は萩
 で百数十首もある。萩はその字からも
 萩の花の代表格にふさわしく垣根や
 屋根ふきの材料としても使われ、古来
 日本人の生活に深くとけこんできた。

中学

明治の文豪、幸田露伴は、あるあらしの日、東京の谷中にある寺の塔を目撃して、「五重塔」という小説を書いた。その中に、激しいあらしにも倒れなかった五重の塔の描写がある。

小 畠 秋 聲 先 生 書